鯰絵翻刻　Ⅱ期

凡例

■本翻刻文は、宮田登・高田衛監修　一九九五年『鯰絵―震災と日本文化』「第五部　鯰絵総目録」に掲載されている翻刻文を参考に作成しました。

■虫損、破損等のために原文が判読不能な場合は、前書の翻刻文を元に記載し、文字の色を灰色にしています。

■一行内の文字数は原文と異なる場合がありますが、原文の行替に従って改行しています。

■翻刻文の読みやすさのため、文の区切りとなる部分に適宜スペースを挿入しています。

■漢字については、適宜旧漢字から常用漢字へ直しています。

■旧かなづかい、カタカナ交じり文　送り仮名については原文表記のままとしています。

■旧かなづかい等により、特に意味がとりにくいと思われる単語、また、鯰絵独特の言い回しで言葉が掛けられているものは、（＝）のかたちで適宜補足しています。

■その他、語句説明等を【※　】のかたちで適宜補足しています。

■本翻刻文では、資料の時代性を考慮し、現代では差別用語、不適切な表現とされる語句をそのまま記載していますが、差別を容認、助長するものではありません。

■参考資料「奉公人請状之事」（あきる野市五日市郷土館蔵）の翻刻文および読み下し文は、あきる野市教育委員会に提供していただきました。

No.125「庶民を襲う大鯰」

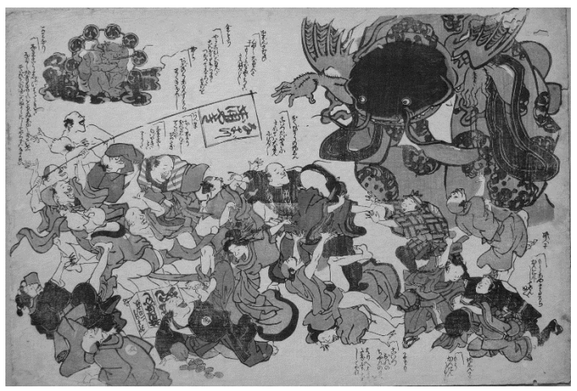
近ばんさむらひ
「ハやハや大へんた
ヱヱ一もくとおさぬうちとハ
さんねん　さんねん

金もち
「やアこれハ大へんだ
こんな事なら早く
つかつてしまつた
ものを

女郎
「あぶのうありんすから
早くきなんし

かミなり
「なまこう　ゑらひはたらきた
なかなか拙者なぞハをよばぬ　しかしにくいやつ
こたび天の国へこぬようにしてやらずハなるめい

おくびようの地しん
「こいつかバやきに
されてハ大へん
にげろ　にげろ



あんま
「ちくしよう
おれのふんどし
をくハいや
かったな

「なまこう
かバやきとハ
どうた

職人子
「もうあやまるから
かんにんしてやんねへ

地しん子
「もう
かんにん
かんにん かんにん

子ども
「こいつ
おれの
ちやんの足をはりへはさ
たな ぶちころ
してやれ

No.126「鯰に御札を貼る要石」

鹿嶋の神の
利益有て　大地震
にうらミ有もの
此所をもつて要石
補助カニ而
あたうちの図

商売　土蔵のうらミ
座頭　金のかたき
地主　地面のうらミ
坊主　師のかたき
諸芸人　我身のうらミ
客人　なじミのかたき
女房　夫のかたき
親ハ　子のうらミ
子供　親のかたき
武士　主のかたき

此人々ハ地しん
にぎり（義理）有て
うらミを
なすこと
あたわず

土方
よし原【※遊女】
金物や
材木や
かや屋根
名倉【※接骨医】
大工
左官
屋根や

No.127「地震世相かるた」

いまに
だんだん
大そう
よくなるよ
△よのなか

おまへごせう（＝後生）だから
つれてにげておくれよ
△たけやぶへ

おやおや　大そうはやく
おつたつたねへ
△まがつた
いへ

いつそ
もふ　てあ
し（＝手足）がさハ（＝障）
つて　おつな
こころもちに
なつたよ
△のじく（＝野宿）の
まかね

このごろでハ
ほふぼうへ
くちをかける
そうだが　ほかの
人にさせてはいやだぜ
△でいりのしょくにん

あれいたくつて
ならないから
そろかにして
おくれよ
△ほねつぎ【※接骨医】

これでまあ
いくどいつたけねへ
△こんやの
ぢしん

おまへそんな
にねてばかり
いずと　はやく
しておくれよ
△火のばん

モウモウ　ごしやう（＝後生）だ
から　しつかりと
おさへつけて
おくれよ
△かなめいし

No.128「鯰と鹿島大明神の首引」

十月の二日ハ
至て吉日にて
二十八宿の虚宿に
あたり　時ハ亥の刻
なれバ
仏説にハ
此日この時の
地震を
帝釈動と
申て
そのしるし
大吉なりと
ふるき書に
ありしとかや

なまづめを
はなしうなぎの
ぬら蔵（＝ぬらくら）をゆり
くづしたる
金の
口
あけ

【※ゑんまの子】
「よいやら

サアノ
ヤア引

【※職人】
「ヤイヤイ　なまづまけて
くれるな　たのむぞ　たのむぞ

「だがもちつと
やんハりやんなせへ
またうごくと
こまりやすゼ

「かしまさま
ここハ一ばんふつて
やつてくだせへまし

【※鹿島大明神】
「いやいや　おれがいづもへ
いつてきやうとおもつて
そこへでると
このしまつ
いごの
ミせしめ
かんねん
しろ
ウン　ウン　ウン

【※鯰】
「ドツコイ
そううまくハ
いきやせん　わしも
ぬらくらしねへ
やうにやけバ（＝焼け場）で
はい（＝灰）をつけ
てきたハ

【※遊女】
「まんざい
らく　まんざいらく
おかしなかほたねへ

【※子供】
「ヤア
ゑんまの
子があの
なかへまちつて
ゐやがるヤ

【※かけ声】
「ヤア引

No.130「生捕ました三度の大地震」

生捕（いけどり）ました三度（さん）の大地震（ぢしん）

だいく
「ヱヱ　モシだんな　このてつつのわるひ
ところハとくといひきけやして
ともどもおわびをいたしやしやうから
まアともかくもわつちらにおあづけ
なすつてくださいやし　じつのことわつち
はじめでしやらうまで　日壱分とつて
すきなすゐをたらふくけづりやすのも
このしゆうのおかげでごぜへやすから
ミにかへてもこのおわびをいたさにや
なりやせんのヲ　かしら

とびの者
「そうさ　そうさ　おめへのいふとをり
こんなことでもなくつ
ちやア　あのつのつらア
見にゆくこともでぎ
やせん　モシモシ
こらア一ばん
わつちらが
つらアたててくだ
せへましな

左くわん
「あのしゆうの申
ますとをり　人の
うれひをよろこぶ
のでハございませんが
こんなことでもなけ
りやアはなのしたが
ひあがりますのヲ
やね屋さん　おめへなん
どもそふじやアねへか

やね屋
「ほんとうにさ
つくろひしごと
ぐれいしてゐた
日にヤアすきな
こめ(の)水がのめや
せん　こちとらが
ためにやア
いはばいの
ちのおや
どうぜんで
ござり
ます　どうぞ△
△かんべんして
やつてください
まし

や師
「へェへェ　わたくし
なんぞもぢしんさまの
おかけで　五ほんや六本のお
あしハあさのうちにもとります
から　ぢしんまへのこめ
やのかりも　五つきたまつたたな
ちん（＝店賃）もすつ
はりすまし
ました
そこらここ
らもおかんがへ
なすつて
どうかこんどの
ところハお見
のがしください
まして
ならふ（＝倣う）ことなら
こり
なく
なつた
じふん
おつか
まへくだ
さいまし
またぜに
もうけができます

からトてまへ
がつて（＝手前勝手）をならべ
だててごたごた※
※わびことを
するに　かしまの
かミもこころにおか
しくわらひをふくミ
けるが　わさとこゑをあららげ
「イイヤならね　かかるつミ
あるやつをゆるしおき
なバ　日本六十余州の
なまづどもよきことに
こころへ　またまたかやうに
しょ人ンにうなんぎをさセ
市中（しちう）を大家破（かば）やきになさんも
はかられ給バ　いごの見せしめに
なべやきのけいにおこなふべしと
さらにききいれ給ハざれバ　せんかた
なく　ミなミなためいきをつきながら
「ユりせまア　とうせう汁
しいひやした

No.131「太平の御恩沢に」

太平の
御恩沢に
高き
まくらの
ふし戸を
やぶり
し
地震(なへ)ハ
いつしか
しづまりて　また
やごとなき
御恵に
つきせぬ
御代のかづかづを
さざれいしの
ミうた(＝御歌)に
ならひて

君が代は
千よに
八千代に
かなめいしの
いはほハ
ぬけじ
よも
ゆるぐとも

No.132「持丸たからの出船」

持丸たからの出船

持丸【※金持ち】

「アア　せつねい　せつねい　せっかくつめて
ひろいためたのを　いちどにはく
とハばかばかしい　なんの
ことだ　かうゆうことなら
いままでつかへバ
よかった
ゲイ　ゲイ　ゲイ

なまづ
「モシたんな（＝旦那）あ
なたふだん
あんまり下方の
者をつめてなんぎ（＝難儀）をさせるからこのよふな
くるしいおもひをなさるのだ　これから心を
なほしてぢひぜんとんをなさるがよろしふござります

ひろいて（＝拾い手）
「これこれ　てまへたちハ　そんなによくばるな　まだまだ
ゆつくりひろつてもたくさんだいいかげんにしてかりたくへ
出かけたがいい　ヲヲ　そふよ　そうよ　ひろいためてぢしんに
ひどいめにあうといけねへから仮宅へいつてつかつて
しまふほうがいい諸方へのゆうずうになるから

No.133「金持ちをゆすりにきたか大地しん」

金持を
ゆすりに
きたか
大
地
しん

なまつ
戯
印

No.134「世直し鯰の情」

世直し鯰の情

△十月二日大地しんの時
いせの御神馬が駈て
きて諸人を赦た
其せうこ(＝証拠)にハ その
時きていた着物の
たもとを見ると 白い毛が
二三本づつはいつてある なんと
有がたひ事でハないかと咄をして
いる所へ 一ツの鯰が出て来ていハく
「今の咄の神馬が赦たのでハない
アリヤおいらの仲間が赦たのだ △「ナアニ
ばかアいハつせへ なまづハ人をくるしめるか
おどかすことよりしねへものが どふして どふして
赦るなぞと情が有ものか 今じや親の敵だと
いつて打殺されるハ 足元の明るひうちにげて
行ツせへ 行ツせへ 【※鯰】「サアそれだから大笑だ たとひ鯰に
しても 千百万寄ても此大地が一分でもうごくものか
地しんハ陰陽の気だ ソレニ鯰をわるくにくむから その
わるくいハねへ人ばかりを赦てやりやした△【※人々】「ハハアそれじやなまづ
にも少ハ情があるのう 「ソリヤおめへ 魚心あれバ水心ありだ

No.135「鯰への見舞い」

とび【※鳶職】

「ヘイごめんなさいやし　わちきアとびのかしらで
ごぜヘエスが　このたびハいろいろおせハくださり
おかげさまでまうかりました　これハあげでごぜいす
ほんのしるしばかり　とびにあふらげとハこの事てござい

あなぐら大工

「ヘイわたくしハだいくのあなはちとまうしますが
これハひやうたん（＝瓢箪）ぐすりでこざりますが　あなたさまにハ
大ミやうやくでこざいます　いたミのところへつけれバ
なまづハひやうたんでをさへます【※瓢箪と鯰の禅問答より】とまうします

どかた

「チトごめんなさいまし　わたくしハどかたで
ございます　このごろハどかたのねへほど
かねかもうかるから　ちつとたれかにかして
やりたいものだ

ほねつぎ（＝骨接ぎ）

「わたくしハほねつきでございますが　このあいだ
までしやうじ（＝障子）やからかさ（＝唐傘）のほねつぎてござり
ましたか　おかげさまでまうかりました

さかん

「ヘイごめんなさい　わたくしハさかんのぬり五郎てござり
ますが　おいおいさかんに　こて（＝鏝）こてまうかりますから

なまづでさけがうまうございます

ざいもくや
「わたくしハざいもくや木へいとまうします　このたびハ
をう木にうれました　けや木ももめずにくろがきも
しのぎました　たくさんまうけすぎました　いくらもめても
木（＝気）ハもめません

四もんや
「わたくしハしもんやでございますが　ぢしんさまのおか
げでにしんがうれるから　さんちんがしんでせつちん（＝雪隠）が
くさからう

だいく
「へイへイわたくしハだいくのいたすけとまうします
なまづくハづ（＝飲まず食わず）にをりましたが　ぢしんさまのおかげで
おかねがたいそうもうかりました　このしなものハ
せけんをおだやかに　ふるへのなをる大工（だいく）すり（＝大薬）でござります

ちうげん
「わたくしハあかいごもんのかミさまのちうげんで
ござりますが　わらじてもうけましたおれいに
おにしめをもつてまいりました　かづもよつぽど
ございます　ぢしんあミなるかずおほく

やねや
「へイわたくしハやねやのとんすけとまうしますが

このたびハおかげさまでやねハぢしんぶき（＝葺）になり
まして　おかねがまうかりますて

こしや（＝輿屋）
「わたくしハこしやのかめハでこさいますが　あなたの
おかげて一チばんのかめへこしこしおかねがまうかりすぎ
ほねがおれて　あしこしがいとふごさります

いしや（＝医者）
「このごびやうき（＝病気）ハじうぐわつ（＝十月）二日のよる四ツじぶん
からふるへがまいりましたか　しかしこのあんばいでハ
かいつておはらのゆふづがつきませう　まづこのかしま
がん（＝鹿島丸）といふくすりをあがんなさいまし

大なまづ
「わたくしもこのあいだのじこう（＝時候）てからだをだいなし
にいたしました　それからといふものハ　あたまがゆさゆさして
こまります　まうせけん（＝世間）をおだやかに　づつうのないよう
にいたしたいとハおもひますが　ふるへがいまだなをりま
せんから　よなほしぐすり（＝世直し薬）でもちいてめでたくなほ
したいものでござります

No.136「じしん百万遍」

じしん百万遍

此たびわたくしハ　千年からくにぐにを
なやめ　鹿嶋様へたびたびわび入
こんど又大江戸をらんぼうふニ
いすぶり　家蔵をたほし　人をおふく
つぶし　もふこんどわ申わけなく
出家いたし諸国かい国に出る
ところい又此せつ金もふけの
人がけさ衣をもつて　一どふの
たのミにハ　なにもほどけの
ためだから　百万べんを
してくだされとゆふか
ら　いたします
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
なまずだ
なまずだ　なまずだ
なまずだ

No.137「切腹鯰」

長者　アイやこのおやぢめも
としよりだてらに
おのおの
がたのは
なぼうに
なつて
むねんのうつ
ぶんはらさんと
こころやたけに
はりつめて
ゆミほど
たのミし
このくしを
ひき
のばしつつ
きて
見れバ
じばらを
きつてかく
までにわびる
こころのしゆしようさに
にくしともおもふこころハうせ
けつてふびんにぞんじます
かやう申さバとしよりの
こころよハしことおぼしめさふが　よう
かんがへてごらうじませ　きやつめが

いのちをとれバどて　このそんもうハ
うまらぬせんさく　よのたとへにも
かたきといふ金にあふたハ
もつけのさいはひ　となたも
ちからのおよぶたけ
サアサアかたきを
おとりなさい
これでほんまうト
とげましたト
金ばこかかへかかへたち
あがれバ　げにもと
ミなミなとくしん
せしハ　げに世な
ほし　世なほし

亡者

「アアわたしらも
このうらミを
はらそふとおもひ
つめて　十まんおくどを
はるばるときたものの
このていたらくと
いひ　あのごゐんきよの
おつしやるところも
ぢごくごもつともだ
これでうらミハ
はれました　はれました

No.138「難義鳥」

難義鳥（なんぎてう）

大地震の翌晩
四ツ時より　郭中の真うへ
並二芝居町のほとりへかけて
あやしき鳥あらハれその鳴くこへ
甚た哀れなり　或時諸職の
ものども　嘉肴をととのへ
酒もりしてる座中より
大鯰の肴をつかひとり　□セい
はるかに舞登りけり
まことにふしぎの事共なり
これ定て深き意味のある事
なるへけれとも　その次第をしれる
もの更ニなけれハ　人々
深くあや
しみ
たりとそ
のちかならす
おもひあたる
事あるへし
と尓いふ

No.139「地震よけの歌」

地震よけの
歌

水かみ(=水神)の
つげ(=告)に
いのちを
たすかりて
六分の
うちに
入るぞ
うれしき

No.140「地震方々人逃状之事」

地震方々人逃状之事

一此ゆり苦労と申者　生得信濃国生須の荘
揺初村出生にて不慥なるふら付者二付　荒魔ども
失人に相立　異変沙汰人諸々方々にゆり出し
申候処めつほう也　火災の義ハ当卯十月二日夜より
翌三日午の下刻迄と相定　困窮人の義ハ難渋無住と
相きハめ　只今御ほどこしとしてさつま芋三俵はしたにてたべ
申候　御救之義ハ七ケ所へ御建じま　御恵に逢目嶋
可被下候事

【※奉公人の名前、素性の項】

※年季・給金・お仕着せなど勤務条件の項】

一鹿島様御法度の義ハ申に不及　お家の八方相傾せ申間鋪候
若此者お台所の女中方の寝息を考へ内証の地震致候哉
又ハゆり逃壁落致候ハハ　急度したるかふばりの丸太を
以て早速らちあけ可申候

【※逃亡・長患いの場合の取り決めの項】

一愁患の義ハ一連たく宗にて　寺ハ夜中ゆりあけ坂
道性寺　市中まつぱたか騒動院大火に紛れ御座
なく候　御発動のゆりしたん【※キリシタン】宗にてハこれなく候

【※檀那寺、禁止されていたキリスト教徒ではないという保証の項】

若物音がたつきひめわひより瓦をふらし候義ハ
無之　万一ゆりかへし等致候ハハ　我等早速まがり出要石を
以てぎうと押へ付　野田へ宿労さしかけ申間敷候　地震の
たびゆつてむざんの如し（＝件の如し）

造作ざん年（＝残念）
鹿嶋の神無月二日

【※年月日】

半性大地割下水
家なしまご右衛門店
つぶれやお土蔵
どさくさほんくらないけんのん橋
みじめや難十郎店
お小屋太助
世並直四郎様

【※保証人の住所と名前】

【※宛名（雇主）】

【※元になっている奉公人請状の詳細は、次の参考資料「奉公人請状之事」を参照】

参考資料「奉公人請状之事」

翻刻文

奉公人請状之事

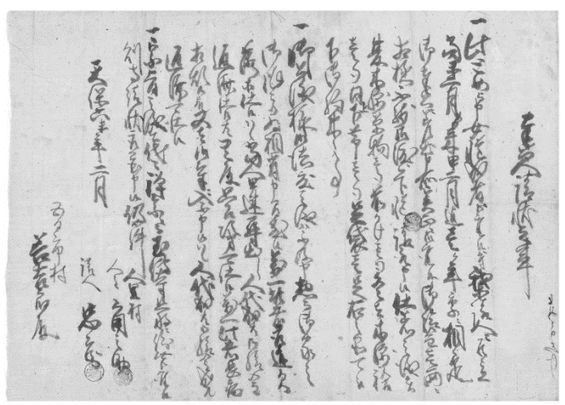
一　此とめ与申女慥成者ニ御座候ニ付我等請人ニ罷立
当未二月ゟ来申二月迄壱ヶ年季ニ相定
御奉公ニ差出申所実正ニ御座候　御給金壱両ニ
相極不残御渡被下慥ニ請取申候仕着之儀者
夏木綿単物壱ツ前かけ壱ツ冬者木綿袷
壱ツ同上下帯壱ツ足袋壱足右之品可被
下御約束之事

一　御公儀様御法度之儀ハ不及申惣而御家之
御作方為相背申間敷候万一此者取逃欠
落等仕候ハヽ当人早速尋出し人代成共御給金
返済仕候共貴殿思召次第可仕候万一此者長病
相煩候欤又者御気ニ入不申候ハヽ人代成共御給金成共返済可仕候

一　宗旨之儀者代々禅宗ニ而玉傳寺旦那ニ紛無御座候
則寺請状取置申候仍如件

人里村
天保六未年二月　人主　角之助　㊞
請人　忠　蔵　㊞

五日市村
善吉郎殿



読み下し文

奉公人請状の事

一　このとめと申す女たしかなる者に御座候につき　我等請人にまかり立ち当未二月より来申二月迄壱ケ年季に相定め　御奉公ニ差出し申す所実正に御座候　御給金壱両に相きめ残らずお渡し下され　たしかに請取り申し候仕着の儀は夏木綿単物ひとつ　前かけひとつ　冬は木綿袷ひとつ　同じく上下（よそゆきぎと普段着）帯ひとつ　足袋壱足右の品下さるべき御約束の事

一　御公儀様御法度の儀は申すに及ばず　惣じて　御家の御作方（法）相そむかせ申すまじく候　万一この者取逃がし欠落等仕り候はば当人早速尋ね出し　人代り成とも御給金返済仕り候とも　貴殿おぼしめし次第仕るべく候万一この者長病み相煩候か　又は御気に入り申さず候はば　人代り成とも御給金成とも返済仕るべく候

一　宗旨の儀は代々禅宗にて玉伝寺旦那に紛れ御座なく候

則寺請状取り置き申し候　仍如件

人里村

天保六未年（一八三五）二月　人主　角之助　㊞

請人　忠　蔵　㊞

五日市村

善吉郎殿

No.141「鹿島恐」

鹿島恐

大国のつち（＝大黒の槌）うごかして　破家なき（＝儚き）も
君の恵に立かへる　民の
竈の賑ハひは
いとおほけ
なき御いさほし
別雷の神かけて　よもや
ぬけじの石御座　うこかぬ
御代のしるし也けり

世直しの地震ハ
いつしか跡もなく
よき事ふれ（＝鹿島事触）の
かしましき（＝姦しき＝鹿島しき）かな

ゑんまのこ
「ゑんやらさ
ゑんまの子
つぶれたのハ
いんがな子

大工
「手間のよいのも
きのふけふで

ござる ヨイ ヨイ
しかししごとハ
ヱロウ長ウござる
ヨイ ヨイ

なまづ
「モウ モウ こり こり
ふりあきた ふりあきた
ぐうら ぐうら

「よなほし よのなか よい よい よい よい

どかた
「はいかき
ぢきやう
みちぶしん
すき くわ
つるはし
もくこう
なんぞハ
どでごんす

「ゑんまのこ 土方のこ
ゑんやらこのサ

No.142「大鯰江戸の賑ひ」

大鯰江戸の賑ひ

鯤鯨ハ七里を潤ハし
鯰は四里四方を
動かし諸職の腕を
振廻させ　自在に儲さする
うへ銭車のめくりよくして
富貴艸の花をちらし　生芝の
芽出しを茂らせ貧福を
交へて正斧を下すとかや

大国のつち（＝大黒の槌）
うこかして
市中へ
宝の山を
つむそ
めでたき

【※鯨の潮から吹きだす歌】

「くじらだ　くじらだ
此まへ品川へ
きたより
よつぽと
ゑらい　ゑらい　ゑらい

「ヤアつなミかと
おもつたら
ゑらいなまづだ
ヨウくるくる
まつぴらだ
しかしゆり
かへし
よりハ
よからう

「うまく
一ばん
ついて
くれ

「はやくこい こい
見せものに出す
つもりだ ここへ
つけ つけ
きてくれろ

「人にミせるにハ
なりたけ大きいのが
いいが 此あいたのときハ
大きすぎた